

## 【実践報告④】

# 命輝く生徒の育成

## ～学ぶ意欲を高め、学び合いを創り出す授業づくり～

幸田町立幸田中学校

### 1 はじめに

幸田中学校は幸田町の中央に位置し、全校生徒 523 名が在籍している。通常学級 15 クラス、特別支援学級 5 クラスの合計 20 クラスで、三つの小学校から入学してくる中規模校である。また、幸田町で一番歴史のある中学校であり、町内全域に多くの卒業生が住んでいて、本校を支えてくださっている。

本校の特色の一つに「全校で一つのものを創り上げる」という伝統がある。その伝統の下、生徒会活動の一つとして、生徒会執行部や各学年のリーダーたちを中心に企画、実行して取り組む全校ダンスと全校合唱に打ち込み、地域や保護者へ発信している。

### 2 実践

#### (1) 実態の把握と研究仮説

研究を進めるにあたり、生徒たちの実態と教師の願いを調査した。生徒たちは、「難しいことでも失敗を恐れないで何事にも挑戦している」の項目において、4割ほどが「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」と否定的に答え、挑戦をためらう姿が浮かんできた（資料 1）。そんな生徒たちの実態を感じ取っていた教師たちの願いは、「課題に果敢に挑戦し、諦めず取り組ませたい」というものであった。

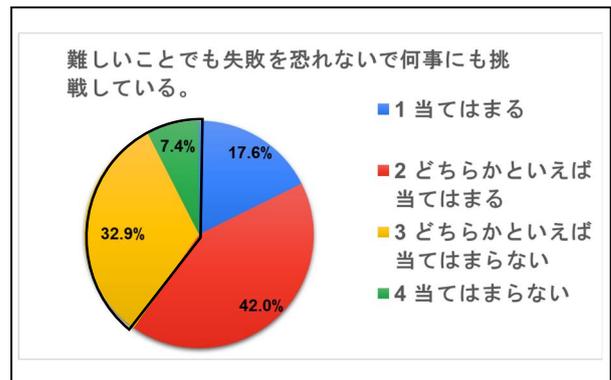
そこで、本校の教育目標である「命輝く学校」を目指し、研究主題を「命輝く生徒の育成～学ぶ意欲を高め、学び合いを創り出す授業づくり～」とし、研究仮説を「生徒の実態や考えを大切にしながら単元を構想し、学びの期待を膨らませる教師支援を行えば、自他の学びを深め、高め合うことができるであろう」として、実践に取り組んだ。

#### (2) 本校の AAR サイクル

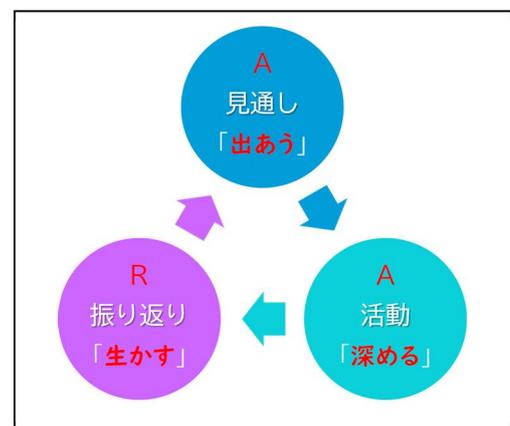
実践に向けて、生徒自らが学びを進めていくためには、生徒の思考に添った学習展開が大切であると考え、生徒の気付きや疑問に寄り添った単元の構想に重点を置いた。

単元の始まりである「出あう」段階では、教材との出会わせ方を工夫し、出会った際の疑問やこれから学ぶことへの期待などがもてるようにした。中盤の「深める」段階では、追究が深まるよう、立ち止まって考えたり、仲間と協働して追究を進められたりできるようにした。終盤の「生かす」段階では、単元を振り返りながら、自分の学びを実感し、次の学びへの意欲につなげられるようにした（資料 2）。

【資料 1 生徒の現状把握シート結果】



【資料 2 本校の AAR サイクル】



### (3) 研究1年目の実践

研究1年目は単元の導入に重点を置いて実践に取り組んだ。

2年生理科「電流と磁界」では、ワイヤレス充電器という生徒にとって身近なものを教材として扱ったことで、学習内容への興味関心が高まった。充電器を実際に分解することで、電磁誘導への理解を深め、ICカードなどにも利用されていることに気が付いた。

1年生保健体育科「バレーボール」では、プロのバレーボール選手を講師に招いた。プロの動きを動画で撮影し、プロの方が大切に話された「思いやり」をキーワードに常に自分たちとプロのプレーを見比べながら学習に取り組むことで、単元を貫く柱となった(資料3)。二つの実践より、導入の重要性を改めて強く感じた。

【資料3 動画を確認する生徒】



### (4) 研究2年目の実践

#### ア きらりタイムの設定

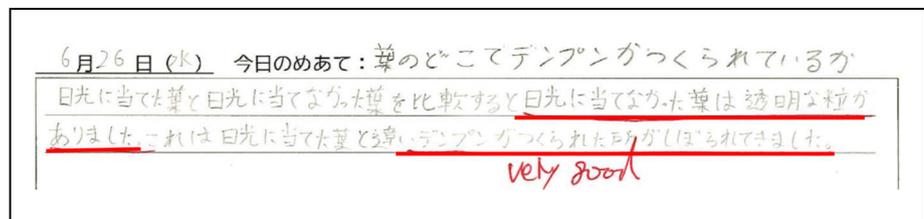
研究2年目は、単元の展開部分を中心に取り組み、「きらりタイム」を設定した。「きらりタイム」とは、学びの深まりや広がりを感じたとき、疑問の解決や解決への見通しを得たとき、新たな疑問が生まれたときなど、この学びの深化を生徒自身が実感できるようにするために、生徒が生き生きと学びに向かう時間とした。

#### イ 2年生理科「植物の体のつくりとはたらき」の実践

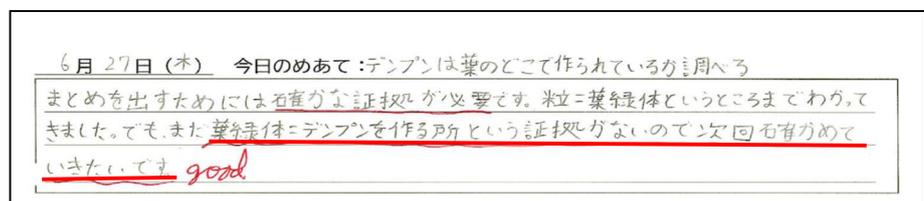
生徒は、植物の栄養であるデンプンはどこで作られているのかを、自分たちで実験を通して見つける学習をした。実験に利用する道具などは教師から示されたが、それらをどう使って調べるのかは、生徒たちが試行錯誤しながら取り組んだ。

生徒Aの振り返りには、日光に当たったものと当たっていないものを比較し「日光に当てなかった葉は透明な粒がありました。当てた葉と違いデンプンがつくられたところが絞られてきました」と記述があり、疑問に対する解決への糸口を見つけているようであった(資料4)。次時の授業の振り返りにも、『粒=葉緑体』である

【資料4 生徒Aの振り返り】



【資料5 生徒Aの次時の振り返り】



と理解はしたものの、葉緑体がデンプンを作るところ、という証拠を次回は見つけない」との記述があり、追究を進めようとする意欲が持続していることがうかがえた(資料5)。

#### ウ 1年生音楽「鑑賞 ヴィヴァルディ「四季」から」の実践

鑑賞の学習で、生徒は「夏」のメロディを自分たちで想像して創作した後、ヴィヴァルディが作曲した本物の「夏」のメロディに出会った。生徒たちが創作したメロディは明るく楽しいものばかりであったが、本物を聞いたとき「激しい、怖い」といった印象を口にするほど、予想と大きく異なっていたこ

とに衝撃を受けていた。そして、稲妻が高い音で表されていることに気づき、ドンとする音で雷が落ちること、リズムが速くなることで稲光が増えていくことなど、音楽の特徴を理解して説明できた。

生徒Bの振り返りの中には、『怖さ』をどう表現するかなどの工夫がたくさんありました。…中略…音楽って面白いな」との記述が見られ、音楽そのものの魅力に気が付くことができた（資料6）。

単元の振り返りでは、ヴィヴァルディが音楽でいろいろな表現をしていることを理解したことで、「どんな工夫がされているかなどを考えていろいろな曲を聴きたい」と、作曲者の意図や工夫を読み取りながら聴くよさに気付く姿があった（資料7）。

### 3 成果と課題

成果として、生徒の思考に寄り添った授業を展開したことで生徒たちの授業への姿勢が変わってきている。毎学期に実施している現状把握アンケートの結果にも表れ、前向きに取り組む生徒たちが増えてきたことが分かる（資料8）。また、学校評価アンケートの保護者の「お子さんは、授業内容が分かると言っている」の結果から、研究が始まったR5年度は

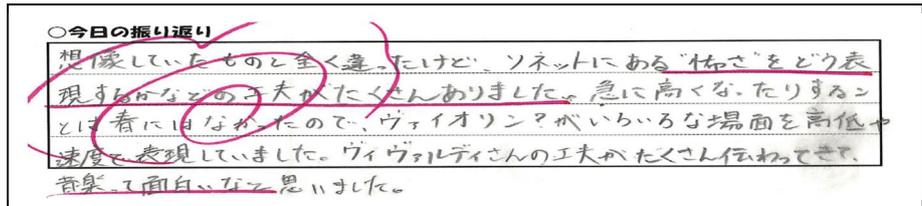
67%を超え、R6年度は全学年で70%を超え、年々増加している（資料9）。2、3年生はともに昨年よりも生徒たちが家庭でも授業の話をして、成長を実感している家庭が増えてきたことが分かる。

課題としては、「きらりタイム」を焦点化することである。生徒たちがより主体的に学習に取り組んだり、より思考を深めたり広げたりするような効果的な教師支援の方法を具体的に考えていく必要がある。

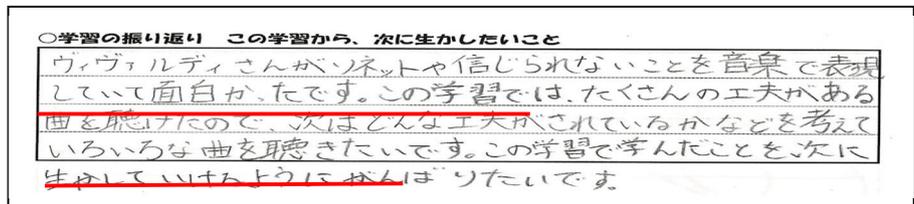
### 4 おわりに

研究を進めていくと生徒たちだけでなく、教師の授業に対する姿勢や考え方が変わってきた。どうしたら生徒たちの興味を引き出せるのか、よりよい手だてはないのかなど、教科部会に限らず学年部会でも話題が多く聞かれるようになった。若手の教師が増えているのは、本校でも例外ではない。だからこ

#### 【資料6 生徒Bの振り返り】



#### 【資料7 生徒Bの単元の振り返り】



#### 【資料8 現状把握アンケートの結果】

	難しいことでも失敗を恐れなくて何事にも挑戦している	
	R5 1学期(%)	R6 2学期(%)
当てはまる	17.6	20.8
どちらかといえば当てはまる	42	45.2
どちらかといえば当てはまらない	32.9	28.5
当てはまらない	7.4	5.5

#### 【資料9 学校評価アンケートの結果】

	お子さんは、授業内容が分かると言っている		
	R4(%)	R5(%)	R6(%)
全体	57.2	67.2	72
3年	62.4	66	73.6
2年	48.9	68.6	71.6
1年	60.5	67	71

そ、目の前の生徒のことを思い浮かべ、生徒を軸にした授業について語り合える雰囲気大切に、生徒も教師も成長していきたい。